

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◆◆◆ No.0558 ◆◆◆

19/11/06

【 11 月はドル高有利、110 円突破も否定出来ず 】

10月23日付の当レターでもレポートしたように、今年ドル/円の変動は「危機的状況」にある。「ハリケーンシーズンの継続」から、荒っぽい変動が期待されていた10月も、月間変動幅は年間4位の2.80円と、いまひとつ振るわなかった。

さて、そうした状況下、いつもながらの経験則をもとにした11月の月間見通しを以下で報じてみたい。巷でもよく取り沙汰されるモノとして、「年末にかけてドル高進行」—という話があるが、実を言うと12月よりも11月にドルは堅調推移することが多く、12月はそのおこぼれを頂戴する、といった程度の動意にとどまる展開が少なくない。ともかく、過去の経験則からすれば、ドルは上げ渋っている感のある8月高値109.32円をしっかりと超え、110円台乗せトライといった値動きをたどる可能性も否定出来ないだろう。

◎11月は相場変動も比較的大きい、110円どころか115円も!?

過去の11月相場を振り返ってみた場合、大きく2つの「特徴」が目につく。うちひとつは、先でも指摘したように「かなりのドル高有利」と言うことになる。実際、1990年以降昨年まで29年間の勝敗は、19勝10敗となかなかの高確率を記録していた。

しかも2009年以降、つまり過去10年に絞れば、2012年からの4年連続を含めて7勝3敗と勝率はさらに高くなる。「年末ドル高」の萌芽は、11月からすでに始まっていると言って間違いないだろう。

そんな、巷間で指摘される「年末ドル高」だが、これは需給要因からも、ある程度説明付けられる。ひとつは、欧米に多い12月末本決算をにらんだ「リパトリエーション(本国送金)」が活発になるためだ。

しかも、12月に入ると、本格的なクリスマスシーズンを迎えることでウインターバカンスを取る向きも多くなり参加者が乏しくなる。そのため、リパトリの動きは前倒しで実施され、11月中から観測されることが多いとされる。また、ヘッジファンドなどは「45日ルール」を導入している先が多く、四半期末の45日前をメドにポジションの巻き戻しに動きやすいのだが、11月の場合には「本決算」を前に、それがグローバルな米企業にも広がることで、さらにドルなど外貨買いが発生しやすいという。いずれにしても、需給要因に裏打ちされた11月のドル高進行には、今年も注意を払いたい。

なお、11月のドル/円相場には、前述した「ドル高有利」という以外にもうひとつ、「月間の変動幅そのものが比較的大きい」という特徴がうかがえる。その典型例は2016年で、11月の月間変動幅はなんと13.36円。ぶっちぎりの年間1位となる大変動だった。

さらに2014年は月間変動幅6.41円で同2位、2013年は5.01円で同5位、2010年は4.18円で同5位、2009年は6.51円で同5位、2008年は7.01円で同4位、2007年は8.71円で同1位—などとなっている。とくに2000年以降は、総じて大きな価格変動をたどっていることは注目に値するポイントと言えそうだ。飽くまでも経験則に沿った展開をたどるといふ仮定からすれば、ドル/円は110円どころか、115円近くまでのドル高進行という展開をたどっても不思議はないのかもしれない。

一方、過去の11月をニュースの観点から調べてみると、世界的に見て政治的な大事件が少なくない。一例を挙げると「徳川慶喜が大政奉還上奏(1867年)」や「ロシアの十月革命(1917年)」「第一次世界大戦が終結(1918年)」「原敬首相が刺殺される(1921年)」「ケネディ米大統領暗殺(1963年)」「ベルリンの壁崩壊(1989年)」などがある。

また、それとは別に「日本での天変地異が多い」とこと「世界的な著名企業などの破たんが目立つ」ことも、過去の11月の特徴のひとつだ。今年も10月に台風19号が襲来し、関東や東北などで甚大な被害が出たことは記憶に新しいが、足もとの11月についても引き続き警戒が必要な気がしている。(了)



当レターは、情報提供のみを目的としたものです。内容に関して正確であるよう注意を払っておりますが、その正確性を保証することはできません。投資や運用にあたっての最終的な判断は、あくまで読者自身の責任と判断によって、ご利用いただくようお願い申し上げます。また、本稿の無断転載・転送もご遠慮ください。

なお、本稿に関する問い合わせは『FXニュースレター』までお願い致します。

